

トン大学で政治学を教えており、現代共産主義問題の専門家である。(矢野 暢)

O. Gordon Young; The Hill Tribes of Northern Thailand, Siam Society, Bangkok, 1962 xiv+92.

著者 Oliver Gordon Young 氏は本書の序文によると、バプチスト宣教師 H.M. Young 氏の子として1927年雲南の山奥に生れ、ラフ族やワ族などの間で父について幼小の時代を送ったという。ヤング氏の祖父も宣教師としてビルマ北東部に生活した人で、3代に亘って山地民族と共に生活しているという。幼時すでにワ語、シャン語、カチン語、雲南語、ラフ語などを解したという。ビルマとインドで教育を受け、カリフォルニアのポリテクニク大学で牧畜の研究をしている。現在タイのチェンマイに住んでいる。北部タイの山地民族を自分自身の未開人への接触と、それらから得た知識によって書いた書物であるという。近年タイ北部の山地少数民族には社会的文化的経済的変化が劇しく、殆どが焼畑耕作民で短いものは5~6年、長いものでも、10~15年で移動する外に、チェンライ地方の Lahu Shi 族や、チェンライ、チェンマイ地方の Haw 族のように外部から近年移動し来たものもあって、その研究は容易でない。本書にはこの近年の動向が示されている点で極めて有益である。取扱われている民族は、Blue Meo, white Meo, Gua-niba Meo, Skaw Karen, P'wo Karen, B'ghwe Karen, Taungthu, Akha, Yao, Lisu, Haw, Lahu Nyi, Lahu Na, Lahu Shehleh, Lahu Shi, Kha Htin, Kha Haw, Kha Mu, Lawa, Phi Tong Luang (Yumbri) の諸族である。個々の民族の記述は、系統、住地、人口、言語、宗教、村落、体形、経済、外部との接触、社会的慣習、村落統治、近來の動向の順序で書かれている。人口は全体で217,000というが、個々の民族の人口など家族数、村の家数、村の数などから一々推計されている。又言語についても言語系統の外に例えば Akha 族はロロの影響を受けたチベット・バーマンであるが、ラフ語70%、雲南語25%、ラオ・タイ語25%というように現在の実状が示されておる。唯集団内部の社会構造についての分析は十分には示されていない。そして勿論個々の民族について割かれている頁数も多くはないので、夫々の民族誌という

訳にも行っていないけれども、外部から之等の民族に接触しようとするような場合には無二の手引となると思われる。多数の写真、8葉の表、6葉の地図も挿入されていて、楽しく読める書物である。(棚瀬襄爾)

Phya Anuman Rajadhon; Life & Ritual in Old Siam, three Studies of Thai Life and Custom, HRAF Press, New Haven, 1961 pp. 191

本書はアヌマン・ラヂャトンの3つの論作を集成した191頁の小著である。アヌマン・ラヂャトン氏には評者も面会したことがあるが、温厚の碩学で、チュラロンコンの前教授であり、もともとアカデミックな教育を受けたことはない由であるが、タイの民俗、文化については最も学識高き人として尊敬されている。三つの論作というのは「農民の生活」、「タイの民衆仏教」、「出産及び育児に関する習俗」である。「農民の生活」は1948年の作でタイ語で出版されたもの、「出産及び育児に関する習俗」は1949年に同じくタイ語で書かれたものが、ミシガン大学のタイ語教授である Dr. W.J. Gedney 氏によって1952年から苦心して英訳されたという。「タイの民衆仏教」はアヌマン・ラヂャトン氏自身が英文で執筆したもので、タイ研究で名のある Dr. Robert B. Textor がまとめて出版することをすすめて収録せられたという。ライフ・サイクルの中で結婚や死、或は病氣等に対する民間療法などが十分取扱われれば、タイの民衆生活のうち重要な点は皆この書物で了解しうるわけである。タイの村落研究などこの頃では随分出ているが、タイの学者の書いたもので我々に利用しうるものは極めて少く、恐らく本書はタイ研究者の必読の書となるものと思われる。著者、訳者、助言者共に面識を得ている人々の作った書物というものも珍しいので紹介したのである。アヌマン・ラヂャトン氏にはこの外 Cultures of Thailand (Thailand Culture Series, National Culture Institute, Bangkok, 1953) という著作もある。(棚瀬襄爾)

R. M. Koentjaraningrat; Some Social Anthropological Observations on Gotong Rojong practices in Two Villages of Central Java, Cornell Univ. Ithaca, New